

機関番号：14401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19530557

研究課題名 (和文) マスコミが対象とするスケープゴートの変遷

研究課題名 (英文) Target of mass media -Scapegoat transition -

研究代表者

釘原 直樹 (KUGIHARA NAOKI)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：60153269

研究成果の概要 (和文)：大事故や感染症などの災害が発生した場合、マスメディアは非難攻撃の対象を発見し、追及する。ある対象 (スケープゴート) を攻撃する記事数は時間とともに変化し、対象自体が次々と変遷する。本研究ではそのような現象を説明するために、非難対象と量の時系列的変遷を説明する波紋モデルを構成した。JR 福知山線脱線事故、O157 や SARS などの感染症、口蹄疫などに関する新聞や週刊誌の記事分析をした結果、非難対象が個人→集団→システム→国家→社会へと変遷する傾向があることが確認された。またこの現象には頻度知覚や記憶のバイアスもかかわっていることが実験によって見いだされた。

研究成果の概要 (英文)：If a disaster occurs, mass media have a tendency to try to identify and pursue a target (e.g. a person, a group, organization, society, and culture) in charge of the tragic event. Frequency of the newspaper articles pursuing targets (scapegoats) varies and fluctuates through time. We construct a wave pattern model to explain transitions in scapegoats. News articles on derailment accident (JR Fukuchiyama line), infection (O157 and SARS) and foot-and-mouth disease were analyzed. The result showed that the targets of attack in the news stories have been initially directed at individual persons, followed by groups, systems, country and society. Furthermore, results of laboratory experiments suggest the existence of biases regarding the perception of frequency estimation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：スケープゴート、非難の変遷、事故報道、記事分析、マスコミ、記憶バイアス

1. 研究開始当初の背景

災害や戦争で多数の人々が死亡するような事態が発生した場合、しかもその原因を特定することが難しい場合、人は明確な原因（責任の所在）を見出すべく努力するような志向性を持っている。人は曖昧な状況には耐えられずフラストレーションに陥る。そして責任所在のターゲットとして最も選択されやすく、また人々のフラストレーションを解消しやすいのは特定の人や組織集団である。ゆえに例え自然災害のような不可抗力の場合でも、非難攻撃の対象として個人や組織が選ばれる。新聞をはじめとするマスコミは「これは自然災害ではなく人災だ」として報道することが多い。それは人々のフラストレーション解消を意識したものであろう。これが場合によっては、対象となった人物や組織だけでなく社会全体に対しても害を及ぼすことがある。例えば災害時に行政当局やマイノリティー集団に攻撃エネルギーが向けられると、本来の問題や課題解決に向けるべきエネルギーが拡散してしまったり、社会に軋轢や不協和を生み出したりする可能性がある。

スケープゴート（生け贄の羊）は個人や集団の攻撃的エネルギーが集中的に他の個人や集団に向けられる現象である。非難・攻撃の対象が正当なものとしてきちんと確かめられているわけではないし、そのような行為の是非が十分吟味されているとは限らない。責任を特定の人になすりつけ自分の罪悪感を軽減する手段としてスケープゴートが用いられるのは大昔からである。

スケープゴートという言葉は古代贖罪の日に行われていたユダヤ人の儀式に由来する。この日には2頭の山羊が引き出され、そのうちの1頭は神の生贄となり、もう1頭は人々の罪を背負わされ荒野に追いやられたということである。後者をスケープゴートと称した。このような考え方は精神分析学の防衛機制の中核的メカニズムのひとつである投射の中にも見られる。それは無意識の中であって意識化されようとする不安に陥るような、忌まわしく、邪悪で、恥ずかしい思考や感情を他者や他国や特に無抵抗な弱い者に押しつけて、自分の中にそれがあることを意識せずに済ませようとするメカニズムである。これにより自分は正しく、落ち度がなく他者が一方的に悪いことになる。そして当人は自分の中の忌まわしいものから解放されて自分を理想化できる。あるスケープゴートが消えればそれに代わる者がスケープゴートとして引っ張り出される。新聞記事が暗いニュースに占められているのはそのような人々の欲望を反映しているのかもしれない。この意味でも他人の不幸は好ましいのである。犯罪者を一方的に糾弾したり、「人

間のことではない、信じられない」といったコメントをしたり、社会の風潮を嘆いたり、社会改革の必要性について声高に語ったりする識者は大衆の代表者として欲望の発散に貢献しているとも考えられる。

スケープゴートに関する古典的研究として Veltfort & Lee(1943)のものがある。彼らは1942年12月31日にボストンで発生したココナッツ・グローブ・ナイトクラブ火災事故の事例研究を行っている。この事件では最初のマスコミの非難攻撃のターゲットとなったのは電球を取り替える時に手元を照らすためにマッチを擦って誤ってデコレーション・ツリーに火をつけたアルバイトの少年だった。その少年に同情すべき点があることが明らかになると次にターゲットになったのは、明らかにいたずらをした者（身元は明らかにならなかった）であった。その後行政担当者や当局がターゲットとなった。具体的には消火設備を点検して許可した消防署、それから防火検査員、消防署長、警察官（私服ではあったが警察官としての職務を果たさなかったと非難された）、警察署長（部下をしっかりと監督・訓練をしていなかったと非難された）、市議会（防火規則を作った）、市長（市の様々な部署に監督責任がある）などであった。その後ナイトクラブのオーナーがターゲットになった。オーナーの場合には新聞は責任だけではなく人格も非難した。可燃性の椅子や飾りを使用していたり、未成年者を雇って人件費を抑えようとしたことを守銭奴として攻撃した。このような関係者をずらりと並べて、読者にスケープゴートとして気に入った者を好きに選ぶように仕向けているようなものだった。しかし読者のターゲットは当局全体に対するものが多かった。それは個人個人の責任を問いつけると話が錯綜して分かりにくくなるのが考えられる。当局の複数の部局は読者にとって弁別できない一体化されたシンボルであり悪人の巢窟のような単純なイメージがもたれることがある。役人や政治的権威や大企業や社会的地位が高い人に対して、人々は日常からある種の妬みや敵意を抱いている。日常はそのようなものは抑制されているが、それが許されたり奨励されるような状況になると潜在的敵意が活性化され、攻撃のはけ口として探し出される。この意味で人々はある個人を攻撃するよりも当局全体を攻撃することを好む傾向がある。彼らをひきずりおろすことにより一時的にでも自分たちの地位が上昇したような気分になる。

このようにスケープゴートが個人や集団と行った狭い範囲から当局や地域社会、国家、世界といった広い範囲に拡散していくことは上記の研究だけではなくいくつかの研究からも示唆される。そのような研究からわれ

われはスケープゴートの変遷に関するモデルを構成することを試みた。

2. 研究の目的

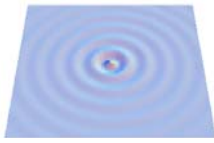


図1 波紋拡散の様子

波紋モデルを構成することにより、この現象の理解を深めた。波紋モデルは水面に石を投げ入れた時に、そこから波が発生し四方八方に拡散していくような状況のアナロジーである。このモデルでは質と量の両面を考慮する。事件直後にはその衝撃によって大きな波紋が発生する。振幅の大きさは攻撃エネルギーの量であり新聞記事の数（量）に反映される。時間が経過するに従って波の振幅は次第に低下していく。全体的にはこのような経過をたどるのであるが、途中で記事数が若干増大したり減少したりすることを繰り返す。途中で記事が増大するのは、その出来事から1週間、1ヶ月、1年というような記念日的な日であったり、事件や事故の重大な手がかりや新たなスケープゴートが発見された場合である。もちろん他の大きな事件が発生するとその波動エネルギーによってエネルギーが低下してしまう。質的な面に関して本モデルは非難攻撃の対象（スケープゴート）の変遷について言及する。波紋の同心円の中心に近い所ではその振幅エネルギーが狭い範囲に集中している。この狭い範囲を個人（攻撃の対象人物）とする。時間経過に従って次第に面積が広がり、中心から離れるに従って攻撃対象が個人から離れ、職場の同僚、職場のシステム、管理者、行政当局、社会、国家というように拡散して行く。中心からの面積が狭い場合、エネルギーは狭い範囲（例えば個人）に集中しているが拡散するに従って1件当たりの攻撃エネルギーは低下する。しかし面積が拡大しているために全エネルギー量は恒常性を保つ。ただし一件当たりの攻撃エネルギーがあるレベルまで低下すれば新聞記事として掲載されたり、テレビで報道されるようなことはなくなる。

このような考え方に基づいて具体的に本研究で研究期間内に検討したのは下記の事項であった。

1. 攻撃対象の変遷は、生じるのか。
2. 攻撃対象は、個人から、より抽象的な、たとえば社会といった方向に拡散するのか。
3. 事象の種類（事故、疫病）により変遷過程が異なるのか。
4. 記憶バイアスがいかにこの現象に影響しているのか。

3. 研究の方法

- (1) 2005年4月25日に発生したJR福知山

線脱線事故に関連するマスコミ報道を題材としてスケープゴートの変遷について検討した。具体的には、事故報道において非難される対象が変遷する過程、そしてそれぞれに対する非難量（記事数・非難程度）の変動を調べた。分析対象として新聞と週刊誌を取り上げた。新聞では読売新聞、朝日新聞、毎日新聞の3誌と週刊文春、週刊朝日、サンデー毎日の4誌を用いた。記録は各記事の日付、頁数、誌名、非難対象、非難の根拠、非難主体、非難程度、記事内容などについて行った。非難の程度については、「非難なし」、「非難」、「非難+感情評価」に分類した。コーディングは、新聞3紙と週刊誌それぞれに1名ずつ合計4名のコーディング責任者をおき、各責任者が基準に沿ってコーディングを行なった。

- (2) JR事故以外の事件（例えば、0157やSARS、口蹄疫などの感染症の問題）も取り上げた。事件事故の種類により、被害者数や被害者の種類、加害者、事故や事件の発生日時、事件事故の性質は大きく異なる。それにより事件事故の種類によりスケープゴートの種類やプロセスが異なるのか否かについて検討した。

- (3) 記憶バイアスに関する実験的研究を行った。事件事故が発生すればマスコミの非難攻撃の対象が、個人、集団、システム、国家、文化社会へと順に変遷していくことがこれまでの新聞記事などの分析結果によって明らかになった。そこでこのようなスケープゴート変遷のイメージが生じる原因について明らかにするために、刺激呈示頻数の時系列変化が主観的判断に及ぼす影響について実験を行った。刺激としては「ぬせ、へよ、めみ」等の無意味綴りを用いてこれらの単語を20分間連続呈示した。実験開始とともに呈示刺激が急増し、開始後2分でピークに達し、その後次第に減衰していった。これはマスコミ報道の記事頻数の変遷をイメージしたものである。変動パターンは全条件同じで、頻度数のみを操作した。

4. 研究成果

- (1) 研究方法(1)に関する結果

1. 非難記事の対象として最初は運転士や車掌のような個人が多く取り上げられるが、次にJR西日本（会社）がターゲットとなり、それから国土交通省・政府、日本の文化や社会と変遷していくような傾向が見られた。すなわち図2に示しているように、非難記事が個人、集団、文化・社会、システム、国家と変遷することが明になった。
2. 非難対象により波紋の周期が異なり、個人の場合は集団より周期が短いことも明らかになった。

またこのような変遷はわれわれのイメージの中でより強く生じている可能性がある。

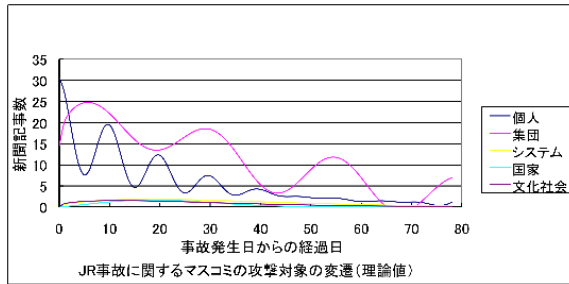


図2 JR 事故に関するマスコミの攻撃対象の変遷

新聞記者をはじめとする報道担当者はそのイメージによって記事のフレーム作りをするために生じている可能性もある。すなわちイメージが予言の自己成就をもたらしているものとも考えられる。そこで新聞記事の攻撃対象の変遷とそれをわれわれが想起する場合の変遷イメージとのずれを検討した。具体的にはJRの福知山線の事故のデータを用いて質問紙調査を行った。調査の結果、図3に示しているようにシステム、国、社会文化などの攻撃回数の少ないものは、実際の新聞記事数より多く見積もられることが明らかになった。また、われわれが持つマスコミの攻撃対象の変遷イメージが実際のマスコミの攻撃対象の変遷とずれが生じることがあきらかとなった。そして、そのずれは、以下の2つの傾向があることがわかった。第1の傾向は、最初に頻度が高かったものが、頻度が低下するにつれて、それまで頻度が低かったものが次第に過大視されるということである。第2は、その過大視にも順番があり、比較的頻度が高いものから順番に過大視される傾向があるということである。このことより、攻撃回数の頻度が低いものほど、主観的ピークがより後方にずれることも明らかになった。

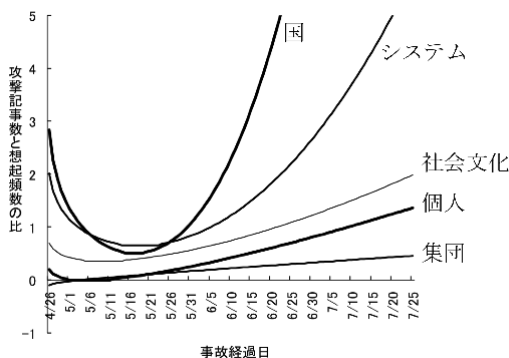


図3 新聞記事の攻撃頻数と想起頻数の変動の比

(2) 研究方法(2)に関する結果

SARS (重症急性呼吸器症候群) と O157 という大流行した二つの感染症に関する報道を対象に取り上げた。この2種類の感染症を取り上げた理由として、まず事故とは異なる感染症の流行に関する現象であること、また近10年で流行した感染症には、他にノロウイルス・後天性免疫不全症候群 (HIV)・麻疹 (はしか)・鳥インフルエンザ・インフルエンザ・肺炎などが考えられるが、①記事の件数 (流行の程度) ②その特異性③一時的な流行である④人間に関するものという条件から SARS・O157 について分析を行い検討した。分析の結果、1) 感染症も社会にパニックを引き起こす原因のひとつであり、また他の原因によるパニックより深刻であると見られていること。2) 災害や戦争やテロと違ってマスコミ情報による間接体験が感染症パニックのイメージ形成に最も影響していること。3) 非難の対象は個人→集団→システム→国→社会文化と拡散していくこと。4) 国に対する非難記事は少ないにもかかわらず人々の国に対する非難量のイメージは誇張されていること。5) 感染症の場合他の災害に比べて国に対する非難の割合が特に多いこと等が明らかになった。

(3) 研究方法(3)に関する結果

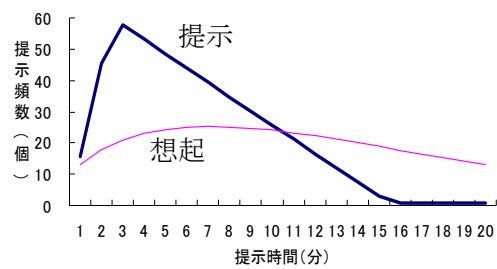


図4. 高頻度単語における提示単語の時系列的頻数と想起された頻数のワイブル分布

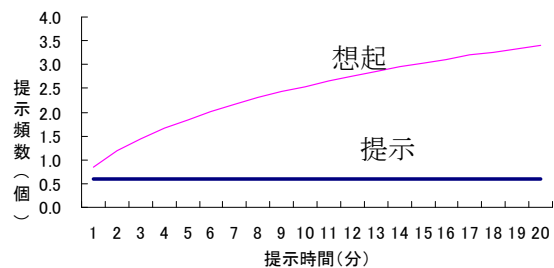


図5. 低頻度単語における提示単語の時系列的頻数と想起された頻数のワイブル分布

図4と図5に示されているように、高頻度刺激は過少視され、低頻度刺激は過大視されること、刺激提示パターン (最高頻度出現時) が高頻度提示条件と低頻度提示条件で一致していても、高頻度提示語は主観的頻度判断

のピークが早く現れ、その後減衰することがわかった。一方低頻度提示語は主観的頻度判断のピークが最も遅く現れ、その後減衰せずむしろ増加することが明らかになった。このような認知的バイアスがスケープゴートの変遷のイメージの背後にあることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①吉川肇子、釘原直樹、岡本真一郎、危機時における情報発信の在り方を考える 新型インフルエンザのクライシスコミュニケーションからの教訓、医学会新聞、査読有、2853号、(2009)、5

②吉川肇子、釘原直樹、岡本真一郎、クライシスコミュニケーションはなぜうまくいかないのか、日本医事新、査読有、4456号、(2009)、95-99

③吉川肇子、釘原直樹、岡本真一郎、新型インフルエンザ発生時におけるクライシスコミュニケーションの問題、日本医事新報、査読有、4447号、(2009)、96-102

④釘原直樹、マスコミのスケープゴートینگ、阪大ニューズレター、査読無、140号、(2008)、12

⑤松本友一郎、釘原直樹、上司との関係評価、コーピングがストレス反応に及ぼす影響、心理学研究、査読有、79巻、(2008)、166-171

[学会発表] (計22件)

①Naoki Kugihara、Effects of affective valence of rare events on overestimation of frequency judgment. Society for Risk Analysis Annual Meeting、2010.12.6、Salt Lake City

②植村善太郎、村上幸史、阿形亜子、釘原直樹、マスコミが対象とするスケープゴートの変遷(18) 大事故報道での非難対象に対する一般人の帰属、日本社会心理学会第51回大会、2010.9.18、広島大学

③釘原直樹、植村善太郎、村上幸史、阿形亜子、マスコミが対象とするスケープゴートの変遷(17) 新型インフルエンザについてのリアルタイム評価、日本社会心理学会第51回大会、2010.9.18、広島大学

④植村善太郎、村上幸史、阿形亜子、釘原直

樹、マスコミが対象とするスケープゴートの変遷(16) テキストマイニングソフトの特質を生かした検討、日本社会心理学会第50回大会、2009.10.11、大阪大学

⑤釘原直樹、植村善太郎・村上幸史、マスコミによる非難対象の変遷過程の解明、日本社会心理学会第49回大会、2008.11.3、かごしま県民交流センター

⑥Naoki Kugihara、Recency inflation effect of rare events on frequency judgment. Association for psychological Sciences Annual Convention (APS '07)、2008.5.1、Chicago

[図書] (計4件)

①釘原直樹、有斐閣、グループ・ダイナミクス 一集団と群集の心理、(2011)、280

②釘原直樹、有斐閣、産業・組織心理学への招待(白樫三四郎 編)第3章 集団・組織、(2009)、67-96

③吉川肇子、釘原直樹、岡本真一郎、中川和之、イマジ出版、危機管理マニュアルどう伝え合うクライシスコミュニケーション、(2009)、184

④釘原直樹 (監訳)、ナカニシヤ出版、テロリズムを理解する 社会心理学からのアプローチ、(2009)、428

[その他]

報道関連情報

時事通信社 防災リスクマネジメントWeb目からウロコの心理学(2) どっちが正しい? 異常時の「理性モデル」と「非理性モデル」=パニックと避難行動(上)(中)(下)
<http://bousai.jiji.com/apps/do/auth/login.html>

2010.6.29

ホームページ

<http://syasin.hus.osaka-u.ac.jp/index-j.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

釘原直樹 (KUGIHARA NAOKI)

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：60153269

(2) 研究分担者

植村善太郎 (UEMURA ZENTARO)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：20340367